

☆四旬節第4主日(3月10日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (歴代誌[下] 36章 14-16, 19-23節)

祭司長たちのすべても 民と共に諸国の民のあらゆる忌むべき行いに倣って罪に罪を重ね、主が聖別されたエルサレムの神殿を汚した。先祖の神、主は御自分の民と御住まいを憐れみ、繰り返し御使いを彼らに遣わされたが、彼らは神の御使いを嘲笑い、その言葉を蔑み、預言者を愚弄した。それゆえ、ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった。

神殿には火が放たれ、エルサレムの城壁は崩され、宮殿はすべて灰燼に帰し、貴重な品々はことごとく破壊された。剣を免れて生き残った者は捕らえられ、バビロンに連れ去られた。彼らはペルシアの王国に覇権が移るまで、バビロンの王とその王子たちの僕となった。こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した。その荒廃の全期間を通じて地は安息を得、七十年の年月が満ちた。

ペルシアの王キュロスの第一年のことである。主はかつてエレミヤの口を通して約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた。キュロスは文書にも記して、国中に次のような布告を行き渡らせた。

「ペルシアの王キュロスはこう言う。

天にいます神、主は、地上のすべての国をわたしに賜った。この主がユダのエルサレムに御自分の神殿を建てることをわたしに命じられた。あなたたちの中で主の民に属する者はだれでも、上って行くがよい。神なる主がその者と共にいてくださるように。」

第二朗読 (使徒パウロのエフェソの教会への手紙 2章 4-10節)

皆さん、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、
— あなたがたの救われたのは恵みによるのです — キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。

こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった

慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備して下さった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。

福音朗読（ヨハネによる福音書 3章 14-21節）

イエスはニコデモに言われた。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

少し春らしい暖かさが戻ってきました。梅の花や早咲きの桜も咲いています。四旬節も半ば、典礼には「喜べ！」の言葉も出てきます。司祭の祭服もこの四旬節第4主日には不似合い(?)なピンクの祭服が許されています。四旬節はなにがなんでも重苦しく悲しい面持ちで過ごすべきだということではないのです。キリストは私たちの喜びのために苦しまれたのです。私たちは復活して父なる神と喜びを共にするためにいるのです。この希望、目的を忘れた四旬節は無意味なのです。

第一朗読（歴代誌[下] 36章 14-16, 19-23節）

ここではイスラエルの民の栄枯盛衰が語られています。あのダビデ王も、ソロモン王も、そして多くの王たちの時代の栄枯盛衰も神の救いの中にあるのだと。バビロンに連れ去られた民を神は異邦人の王の力によって解放し、エルサレム帰、エルサレム神殿の再建が成し遂げられるのです。そこには人類の歴史を通して救いの業を成し遂げられる神がおられることを信じることの大切さをこの書物は告げているのです。

第二朗読（使徒パウロのエフェソの教会への手紙 2章 4-10節）

父なる神はイエス・キリストによって私たち人間を神のうちに包み込むことを望まれました。被造物である私たちですが、神とは無関係のままにされることがなく、かえって最も近い、親しいものとされることを選ばれたのです。したがって私たち人間が罪に死んだものとしていることを望まれず、ひとり子イエス・キリストによって、生かし、起こし、復活させることを望まれたのです。救いは人間の業によらず、神の愛によることをパウロは述べています。

福音朗読（ヨハネによる福音書 3章 14-21節）

神に逆らい罰を受けたイスラエルの人々がモーセの掲げた杖の先にある蛇を仰ぐと、命を得られたエピソードをイエスは持ち出され、それと同じようにご自分が十字架につけられ死ぬことによって人々を救うことになるニコデモに言うのです。自分は父から遣わされたものとして、父なる神は世を裁くためではなく、世を救うためにあるのだと語っています。また、イエスを信じないものはもうすでに裁かれているとも述べています。北斗の拳に「お前はもう死んでいる」というケンシロウのセリフがありますが、まさに生きていても死んでいるのです。闇を好み、光を憎むこと自体が裁かれているというのです。その行いがばれないために光のほうに来ない、後ろめたい心のままに過ごすことになるのです。疑うことも、ましてや罪を知らない子供たちは毎日心から喜び、晴れやかに過ごしています。大人の私たちはどうでしょうか。罪の女の人を問い詰

めた人たちにイエスは語り掛けます。「罪を犯したことの無い人が石を投げな
さい」と。人々は老人から始め一人また一人とその場を去っていったのです。
ゆるしの秘跡は犯した罪を数え上げることではありません。神の前に心晴れ
やかに生活できていないことを悔やむことなのです。今日の入祭唱には「神の
民よ、喜べ。悲しみに沈んでいた者よ、喜べ」とあります。私はどうでしょうか。



「幸いなるかな・・・」山上の垂訓の教会（2018年）

P.S.

来週の日曜日には12時から赤ちゃんの洗礼式があります。お祈りください。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光